

ワンピース



しまった、と思ったときは、もう遅かった。やつちやった。近道なんかするから、隠れていたコンクリートの塊に足を取られる。ばか。

折れたな、とみさきは思った。意外に冷静、でも次の瞬間、くるぶしのあたりが、かあつと熱くなって、いっきに痛みの波がやってきた。みさきが次に思ったことは、「修学旅行、行けない」だった。

どうしよう。

「みさき、きいてる？　これはね、行くなっていうことなのよ。最初から、この旅行には、行かせたくなかった、ママは。いま痛い思いをしているあなたには気の毒だけど、よかったのよ、これで」

みさきのママは、救急外来の出口で、ギプスがまかれたみさきの右足を見おろしながら、なんだかほっとした顔で言った。そう見えただけなのかもしれない。でも。みさきは、ひどい、と思った。わたしが痛い思いをしてることより、旅行のこと、いま、言う？

入院はぜったいに、いや。みさきの半泣きになった顔に、担当になった若い医師は、「ベッドも空いていませんし、お帰りいただいてもいいですよ」と、パソコンに向かったまま、抑揚のない言った。

みさきのママは、「車を回すから、ここで待ってなさい」と、駐車場に歩いて行った。脈打つような痛みと、しびれるような痛みが交互にやってくる。松葉づえにすぎると、バランスが崩れて、右足にさらに痛みが走る。

旅行に行けないなんて、あんなに準備したのに。みさきは、泣きたかった。この足！

「だれがなんと言おうと、行かせませんからね。あなたも無責任なこと、言わないでください。この子の足、折れているのよ。行けるはずないでしょ」「松葉づえだって、車いすだって、あるじゃないか。医者だって、大丈夫って言ったんだろ。せつかく、その気になってるんだから、行かせてやればいい。担任の先生も、友だちも、みんなでめんどろ見てくれるって」

そういう問題じゃないのよ、あなたはなんにもわかっていない、というひとことをのどの奥から絞り出し、みさきのママは、怒りで膨らんだ眼でパパをにらみつけ、ボタンとドアを閉めると、居間を出て行った。窓際の熱帯魚が、いつせいに方向を変える。部屋にはパパとみさきだけが残された。それから、晩ごはんのカレーの匂いも。

「……まあ、行ったらいいだろ。あとは何とかするから。それより、無理するなよ、気をつけて、な」

パパはそう言うと、メガネをはずし、両手で顔じゅうをごしごしこすった。それで、決まりだった。みさきは、足の痛みが少しだけ減ったような気がして、久しぶりに小さく笑った。

「これまで、修学旅行委員で、一年間、あんなに頑張ってきたんだから。みさきこそが行かなくちや。やあ、よかった、よかった」

黒田先生は「みさき、参加」の知らせを受けると、大きな声で、わはは、と笑った。

とりあえず、一件落着。

みさきのママには、何度もかみつかれたからな。「もつとちがう修学旅行先がいくらかもあるでしょう。中学最後の大事な旅行なのに、なんでわざわざ子どもたちを、あんな楽しくもないところに連れて行く必要があるんですか」って。

楽しくもない、か。たしかに。

七五年もむかしの、戦争が残した傷跡をわざわざたどっていくのは、だれだって楽しくはない。それでも子どもたちは、一年をかけた事前学習に、けっこう熱心に取り組んでいた。はじめは、いい加減だったり、いやいやだった子らも、だんだんその気になって。もつとも俊介みたいに、最後まで知らん顔のやつもいたが。準備の中心になったのが、事前学習委員、なかでも、みさきは隣の班の凜子と同じぐらい熱心だった。

凜子は弁当箱で、みさきはワンピース。こだわっていたな、ふたりとも。資料館のウェブサイトにあった遺品の写真が、ふたりになにかをささやいた、ということだろう、と黒田先生は、ぼんやり思っていた。